

機関番号：34603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20510245

研究課題名（和文） 日本的近代家族の成立における性と生殖—少子化・専業母化・家族の情緒化

研究課題名（英文） Transformation of Modern Family in Japan:

Approach to Emotionalization from the Perspectives of Sexuality and Procreation

研究代表者

宮坂 靖子 (MIYASAKA, YASUKO)

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：30252828

研究成果の概要（和文）：

(1) 主に大正期を中心に展開された産児調節運動にかかわったオピニオン・リーダーらの避妊の可否論に着目して、「避妊＝可」言説のロジックを抽出しとその内容と構成の分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

男性論者による「避妊＝可」言説は、①優生学による人種改良・社会改良、②堕胎・嬰兒殺しの廃絶、③晩婚化・娼婦対策、④夫婦の性愛化に関する言説により構成されていたこと、避妊受容の論拠が国家・社会を主眼にした公共圏の論理からセクシュアリティに関する親密圏の論理へと変化していたことがわかった。また、男性論者と女性論者の「避妊＝可」言説には違いがあることも明らかになった。女性論者は、避妊を正当化する根拠として「生殖の自己決定権」を主張したが、他方で、夫婦の性愛化には拒否的であった。近代家族成立の指標である「結婚—性—愛」三位一体観の形成プロセスにはジェンダーによる差異があったことが明らかになった。

(2) また、同様に大正期に発行された女性雑誌（主に『主婦之友』と『婦人公論』）を資料として分析した結果、以下のことが明らかになった。得られた知見の第一は、1920年代は、男性の性欲コントロールと子ども数のコントロールの手段である「避妊」が同時に社会問題化していたことである。従来、避妊の受容は女性側の心理的・身体的要因や子どもの教育、家庭経済（生活水準）などの観点から解釈されてきたが、「夫婦関係の性愛化」という概念の成立が、男性の避妊への関与を積極化させていた。また、第二に、新中間層の人々は、女性雑誌を一つの回路として、「幸福な夫婦・家族」のイメージを形成する情報を入手していたが、同時に、避妊に関する情報やその具体的方法の入手と実行というプロセスを通して、夫婦関係の親密化を経験していた。

つまり、近代日本において避妊の導入は「家族の情緒化」の促進に対して一定の貢献を果たしたと言えよう。

研究成果の概要（英文）：

(1) I examined the logic used in the birth control movement in the Taisho Era. For this purpose, I analyzed the discourse of pro-contraception, especially that of the male advocates. As a result, they claimed their reasons for supporting contraception as follows: ① to reform the society in terms of eugenics, ② to eradicate abortion and infanticide, ③ to improve the late marriage and the prostitute issue, and ④ to eroticize the marital sexuality. Then, they gradually changed the logical ground from that based on the perspective of “public sphere” to the one of “intimate sphere.” Additionally, in comparison with the discourse of female advocates, there was a gender gap between them. The female advocates claimed contraception as the reproductive health rights, while they were reluctant to eroticize the marriage. Finally, it was revealed that the gender gap in the discourse of birth control had affected the process of forming the trinity of “marriage, sex, and love,” the ideology known as the symbol of the modern family.

(2) Otherwise, I demonstrated the reality of birth control in marriages and explicated the meanings and the images given to married couples and families through an analysis of the description of birth control mainly in the 1920's. Therefore I examined articles in two female magazines; "Fujin-koron" and "Syufu-no-tomo" 1916 to 1930. The discussion is developed as follows: ① In the 1920's both the sexual control among men and birth control in family had emerged as social issues. ② Not only the wives, but also husbands were involved with birth control. Husband's initiative in birth control was induced by sexualization within marriage. ③ People among the new middle class had been collecting images of a blissful married life. And they had actually created intimate relationships by conversing openly about birth control.

Finally I concluded that the willingness to accept birth control is an important factor to promote emotionalization of families.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：①社会学 ②歴史社会学 ③近代家族 ④ジェンダー ⑤セクシュアリティ

1. 研究開始当初の背景

日本に近代家族論が紹介されてから四半世紀が経過し、日本における近代家族論は停滞期を迎え、近年近代家族そのものが論じられることはほとんどなくなっている。しかし、他方で、グローバル化する国際社会の中で、アジア社会における近代家族化の動きが顕在化し、近代家族(変種)の誕生の可能性を含めた家族変動が議論されるようになってきている。

このような国際的な研究動向を背景に、「脱・近代」化に困難をきわめている日本において、今一度、近代家族の成立プロセスを実証的に問い直し、「日本的近代家族」の独自性を明らかに、「脱・近代家族」への課題を明確にする必要が生じてきている。

また他方で、日本国内においては、セクシュアリティ研究の発展が著しく、家族研究へ越境する卓越した研究も見られるようになった。そこで、近代家族論とセクシュアリティ論を架橋することにより、新たな近代家族論の枠組みを提示することも要請されている。

このような背景をふまえ、本研究では以下の3つの独自の視点を生かして、日本の家族の近代化にアプローチすることを試みる。

(1) 日本における近代家族化を、「家族の

情緒化」に焦点をあてて、そのプロセスを明らかにする。

(2) 「家族の情緒化」を「避妊」の視点から実証することを目指す。避妊は、子ども数のコントロールである手段であることから親子関係へのアプローチを可能にするが、それと同時に、「性における生殖と快楽」の分離を可能にする手段であることから夫婦関係へのアプローチも可能にする。つまり、家族の関係を、親子、夫婦の一方からではなく、両者を総合的に捉えることが可能となる。

(3) セクシュアリティ研究の成果を家族社会学の再編に有効に活用する。従来、近代家族論は家族内関係に焦点を当てる傾向があったが、セクシュアリティ論の成果を摂取することにより、家族の関係を、家族内/家族外の双方から重層的にとらえることが可能となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における近代家族論の到達点を確認した上で、日本における近代家族成立のプロセスを、「出生コントロール」、すなわち「避妊」の観点から明らかにし、日本における近代家族論の再構築に貢献することを目指す。

第一に、欧米、日本の双方でなされた近代

家族研究のレビューを行い、今日の到達点を明らかにするとともに、問題意識、研究方法、議論のポイントを整理する。

第二に、大正期を中心とした産児調節運動のオピニオン・リーダーや避妊に関する発言を行った論客を対象に、彼ら／彼女らの言説を考察する。その際に、当時の「避妊＝可」言説と「避妊＝不可」言説の双方に着目する。避妊導入に際して何が問題だと認識されていたのか、それに対して避妊賛成派はどのようなロジックを用いて、避妊を受容することを試みたのかを明らかにする。

第三に、当時の女性雑誌の読者層の避妊の意識と避妊に対する行動を明らかにし、このことが「家族の情緒化」に与えた影響を考察する。その際に、社会において影響力をもっていた論客の言説が、いかに新中間層の人々の避妊の心性に影響を与えたのかという両者の関連性にも着目する。

3. 研究の方法

第一の目的に対しては、日本、欧米諸国でなされた近代家族の著作や論文を資料にして、研究のレビューを行う。

第二、第三の目的については、主に、大正期である 1920 年代を対象とする。ただし、必要に応じて明治末期から昭和初期の動向も参考にする。

第二の目的に関しては、当時避妊について発言したオピニオン・リーダーたちの著作や論説等を資料として用いる。第三の目的に関しては、当時新中間層の女性らが購読していた『主婦之友』『婦人公論』を中心とした女性雑誌に掲載された避妊関係記事を資料とする。

4. 研究成果

(1) 近代家族論のレビュー

西欧の社会史研究における近代家族論と日本における近代家族論のレビューを行った結果、避妊の受容については、まず親子関係の観点が持ち込まれ、次に夫婦関係への「性愛化」という視点が重要視されたことが明らかになった。

さらに、アリエスらを中心とした西欧の社会史研究のインパクトを受けて始動した日本の家族社会学における近代家族論は、近代家族概念が形成された第一期（1985～90年）、近代家族概念についての論争が展開された第二期（1990～2000年）、そして学問が停滞した第三期（2000～2005年）を経由し、現在、第四段階（2005年～）の「脱構築期」を迎えているという流れが把握できた。その契機となったのは、セクシュアリティ論と近代家族論の接合であった。

(2) オピニオン・リーダーたちの避妊の言

説分析

主に大正期を中心展開された産児調節運動にかかわったオピニオン・リーダーらの避妊の可否論に着目して、「避妊＝可」言説のロジックを抽出し、その内容と構成を分析した結果、以下のことが明らかになった。

男性論者による「避妊＝可」言説は、①優生学による人種改良・社会改良、②堕胎・嬰兒殺しの廃絶、③晩婚化・廃娼対策、④夫婦の性愛化に関する言説により構成されていたこと、避妊受容の論拠が国家・社会を主眼にした公共圏の論理からセクシュアリティに関する親密圏の論理へと変化していたことがわかった。また、男性論者と女性論者の「避妊＝可」言説には違いがあることも明らかになった。女性論者は、避妊を正当化する根拠として「生殖の自己決定権」を主張したが、他方で、夫婦の性愛化には拒否的であった。近代家族成立の指標である「結婚＝性＝愛」三位一体観の形成プロセスにはジェンダーによる差異があったことが明らかになった。

(3) 女性雑誌の読者層の避妊の言説分析
女性雑誌（主に『主婦之友』と『婦人公論』）を資料として分析した結果、以下のことが明らかになった。得られた知見の第一は、1920年代は、男性の性欲コントロールと子ども数のコントロールの手段である「避妊」が同時に社会問題化していたことである。従来、避妊の受容は女性側の心理的・身体的要因や子どもの教育、家庭経済（生活水準）などの観点から解釈されてきたが、「夫婦関係の性愛化」という概念の成立が、男性の避妊への関与を積極化させていた。また、第二に、新中間層の人々は、女性雑誌を一つの回路として、「幸福な夫婦・家族」のイメージを形成する情報を入手していたが、同時に、避妊に関する情報やその具体的方法の入手と実行というプロセスを通して、夫婦関係の親密化を経験していた。

つまり、近代日本において避妊は「家族の情緒化」に対して重要な役割を果たしていたと言えよう。従来の家族社会学や歴史社会学における近代家族研究では、家族の近代化は「教育家族化」の観点から把握されることが多かったが、本研究によって、「夫婦の性愛化」要因の重要性が明らかになった。ただし、この要因が女性と男性に与えた影響には差異があった。近代家族化は家族単位に一枚岩で進行したのではなかったといえる。したがって、家族の近代化／家族の情緒化プロセスにおけるジェンダー非対称性に着目して実証研究を積み重ねていくことが今後の研究の課題となる。

研究者番号：30252828

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 宮坂靖子、近代日本における避妊の受容と家族の情緒化－1920年代を中心とした女性雑誌の言説分析－、日本家政学会誌、査読有、61(5)、2010、265-275.
- ② 宮坂靖子、近代家族に関する社会史的研究の再検討、奈良大学紀要、査読無、38、2010、157-170.
- ③ 宮坂靖子、日本における近代家族の受容とその展開、奈良大学紀要、査読無、39、2011、75-89.

〔学会発表〕(計5件)

- ① 宮坂靖子、日本における「避妊」の受容と家族の情緒化、2008年9月07日、第18回日本家族社会学会大会、大正大学.
- ② 宮坂靖子、近代日本における避妊の受容と家族の情緒化、2009年10月11日、第82回日本社会学会大会、立教大学.
- ③ 宮坂靖子、近代日本における避妊の受容と家族の情緒化、2010年5月30日、第62回日本家政学会大会、広島大学東広島キャンパス.
- ④ 宮坂靖子、戦間期日本における産児調節運動の避妊言説とその実践、2010年11月13日、比較家族史学会2010年度秋季研究大会、埼玉学園大学.
- ⑤ 宮坂靖子、日本における近代家族の歴史社会学－避妊の視点からみる家族の情緒化－、2010年12月22日、三田哲学会講演会、慶應義塾大学三田キャンパス.

〔図書〕(計1件)

- ① 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児・女の育児－家族社会学からのアプローチ』昭和堂、2008. 担当部分：宮坂靖子、「育児の歴史－父親・母親をめぐる育児戦略」25-44.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮坂 靖子 (MIYASAKA, YASUKO)
奈良大学・社会学部・教授

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし